

【聖書】

ルカによる福音書 19:11 人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。¹² イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。¹³ そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をしなさい』と言った。¹⁴ しかし、国民は彼を憎んでいたのので、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。

¹⁵ さて、彼は王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知ろうとした。¹⁶ 最初の者が進み出て、『御主人様、あなたの一ムナで十ムナもうけました』と言った。¹⁷ 主人は言った。『良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。』¹⁸ 二番目の者が来て、『御主人様、あなたの一ムナで五ムナ稼ぎました』と言った。¹⁹ 主人は、『お前は五つの町を治めよ』と言った。²⁰ また、ほかの者が来て言った。『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。²¹ あなたは預けないものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。』²² 主人は言った。『悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。わたしが預けなかったものも取り立て、蒔かなかつたものも刈り取る厳しい人間だと知っていたのか。²³ ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。』²⁴ そして、そばに立っていた人々に言った。『その一ムナをこの男から取り上げて、十ムナ持っている者に与えよ。』²⁵ 僕たちが、『御主人様、あの人は既に十ムナ持っています』と言うと、²⁶ 主人は言った。『言っておくが、だれでも持っている人は、更に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。

²⁷ ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ。』

1 タラントンとムナの譬え(導入)

以前、「譬えとは、読む人を巻き込む」と話した事があります。譬えは、なにかをそのものずばり叙述せずに、他のものを通して対象を指し示すもの、「この譬えの中の〇〇は一体何を指しているのだろうか」と読む者は考えざるを

得なくなるのです。今日の「ムナの譬え」は、まさに、読む者を巻き込む典型的な譬えと言えらると思ひます。

この譬えと似た話がマタイ福音書にありまふ。タラントンの譬えです。マタイの方がよく知られていまふ。マタイ福音書のタラントンの譬えは、「神からいただいた賜物を十二分に用いなさい」といふ教えであるといわれていまふ。一方、ルカのこのたとえ話は、マタイ福音書のタラントンの譬えほどは知られてはいまふせん。なぜでしょう。この譬えには、二つの流れがあり、分りにくいからではないかと思ひます。二つの流れのひとは、「我々はこの人を王にいただきたくない」とする市民達の話し、そして、もうひとは、ムナを委ねられた僕達の話しです。この譬え話では、二つの話しが絡み合ひながら、ひとのたとえ話として、救い主と人間の関係を描かれていまふといえます。私達人間の現実に向かつて、神の救いがぐっと差し込まれていくさまが描かれていまふといひと思ひます。

2 神を神とできない人間の闇

ひひとつ目の、王に反抗する市民達の話しですが、ここに語られていまふような事件が、主イエスがお生まれになつた頃に起こつていまふました。主がお生まれになつた頃のイスラエルは、クリスマスの幼児殺しで有名なヘロデ大王が統治していまふましたが、彼はローマ帝国の巨大な軍事力を後ろ盾とした王でした。このヘロデ大王が死ぬと、領地は息子たちに分割されまふ。ユダヤ地方を引き継いだアルケラオスは、父のヘロデ大王同様に、ローマ皇帝に王位をさずけてもらおうと帝国の首都ローマに旅立ちまふ。このアルケラオスは暴虐な性質で、市民の評判があまりにも悪く、彼のあとを追つて、市民の使節団がローマへと向かい、彼の王即位を阻もうとしたのです。その影響かどうかは分りませんが、アルケラオスは、ローマ帝国から王としてではなく、領主という地位を与えられまふ。そして、帰国した彼は、王と同じような権力をふるひ、自分の即位に反対した市民たちを虐殺したそうです。しかし、アルケラオスはあまりにも暴君であつた為ひに、市民の抵抗が続き、結局、10年後にはローマ帝国から領主の地位を追われ、ガリア、今のフランスに流され、そこで死にまふ。主イエスの周りにいた弟子たちも群衆も、この歴史的な事件は知つていまふ筈です。主は、人々がよく知つていまふる暴虐な権力者の事を語つていまふようです。しかし、実際は、全く別の事を語つていまふ。この家柄のよい人が主イエスであり、「我々はこの人を王にいただきたくない」といふ市民が私達人間だからです。

私は、日本ナザレン教団の出版委員で奉仕していまふ。毎月皆さんにお配りする新報やふくいんの編集・校正やホームページの管理が主な仕事です。先週、その出版委員の中で、ナザレン新報1月号に掲載予定の記事をめぐつて議論が巻き起こりました。ある方が日本ナザレン教団の戦争責任告

白を蔑ろにするような言葉を使って、新報の記事を書きました。この記事を新報に載せるべきか、否か。出版委員のほぼ全員が、「この用語は適切ではない」という判断です。しかし、だからと言って、執筆者の表現の自由を制限していいものか？そこで意見が別れました。まだ、議論は続いているのですが、白熱し自分と意見が異なる者への攻撃的な言葉が飛び交い始めました。その様子を見てつくづく思わされたのは、「正義は暴走する」という現実です。暴走した正義は、相手への想像力を奪い、攻撃へと転じます。そういうことは私達の間ではよくあるのだと思います。私達に取り付くのは正義だけではない、欲望も取り付き、「すき放題して欲望を満足しろ」とそそのかします。正義や欲望に取り憑かれた人間によって、今も世界に悲劇が耐えません。人間の闇の深さをつくづく感じるショッキングな現実をある説教者が説教の中で紹介していました。そのまま読みたいと思います。「先日テレビで見て深刻な衝撃を受けたのは、シリア難民の事です。彼らは凄惨な内戦を避けて、隣国のバイルートに命からがら避難しました。でも、その地では様々な差別を受け、食料も仕事もなく、金もないという惨めな生活が始まります。当然、精神を痛める人が出てきます。家庭内で男が荒れ、母や妹に暴力が振るわれ、若い娘はお金を求めて売春をせざるを得ない。そこでも、言葉と同時に様々な暴力を受けます。そして、男女を問わず、何と自分の腎臓を売ることまでしているのです。それだけでも、私は衝撃を受けました。でも、さらに衝撃は続きました。難民キャンプでは、子どもの誘拐が起こるといいます。イスラム教徒の女性たちは上から下まで寸胴の服を着て、目だけ出していることがあります。つまり、男が女装しても分からないのです。そして、女装した男が、飢え渴いた子どもにジュースをご馳走すると言って誘拐し、体を切って使える臓器を奪い、売るのでそうです。買う者がいるからそういう商売がなりたつのでしょう。そして、内臓が取れた遺体はゴミ捨て場に遺棄されていたそうです。内臓が取られた人間の遺体が、ゴミ捨て場に捨てられる。そういう人生があるのか、と愕然としました。何と言ったら良いか分かりません。」

子供を誘拐して殺し内蔵を取って売る、それを買う人がいる、何れも人間の仕業だとは思えません。シリアは、大統領と反対陣営と、それぞれを応援する諸外国が入り乱れての内戦状態。暴走する正義が生み出す戦争が難民を産み、その難民のうちでも弱い子供や女性、高齢者が欲望と暴力の犠牲となる。そして、犠牲になった被害者が加害者となって新たな悲惨をうむのでしょう。一体なぜこんなことが？と思わざるを得ません。

聖書は、この暗い世界の闇の中核には、ひとつの言葉が潜んでいると語っているようです。そこから闇が広がっていると言う言葉、14節です。「我々は、この人を王にいただきたくない」。我々は、神を王としてはいただきたくない、そうやって自分たちが王位に座ろうと、相争う。神の座に座ろうとする。いや、神の座に座って、神が造られた命を好き勝手にしようとする。しかし、そうやっ

て自分達が神の座に座った時、私達は人間ではなくなる、聖書とこの世界の現実はそのように語っているようです。「我々は、救い主を王にいただきたくない」これは私達の自然な姿なのだと思います。敵を愛するような人を王として頂いたら、自分たちの好き勝手にはできなくなるからです。自分達が王になれない、人を思い切り憎む事も無視する事も争うこともできなくなります。だから、主イエスは、この世の敵、私達の敵なのです。ある説教者は、こう言いました。「神と私は不倶戴天の敵同士でありました」共に天を頂くことができない、つまり、私達は神と共に生きることができない仇どうしであったのです。

しかし、この不倶戴天の敵を救う為に、神は独り子を世に送りました。み子はこの世へと来てくださいました。主イエスは、14節の市民の言葉に救い主が迎えねばならない非業の死の予感をこめているのではないかと思います。しかし、浅はかな人間の思いをはるかに超えて、主は甦られます。そして、父のもとへとお帰りになるのです。ですから、高貴な家柄の人が旅立つ「遠い国」は、ローマ皇帝のいる帝国の首都ではなく、天の父なる神がいらっしゃる所です。主イエスは、十字架と復活のあと、弟子たちと40日間共にいて、神のみもとに上っていかれた、主の昇天を示しています。今も主イエスは神のみもとにおられます。この地上では、体をもった主イエスとはお会いできませんが、終わりの日に、主イエスは、必ず再び戻って来る、と聖書は語ります。そのとき、神のご支配が完成し、主イエスは、その神のご支配を実現する王として、この地上に君臨する、そう教会は信じ告白してきました。今日の譬えで言えば、高貴な家柄の人が王位を受けて戻って来る、というのが、主の再臨を示すとされています。

3 稼いだのは誰か？

さて、この高貴な人は、自分を敵として憎む市民の間に、僕達を残して旅立たねばなりません。彼はその前に十人の僕を呼び集めたという。聖書で「十」というのは、集まりを表す数字だそうです。主人は、僕全員を呼び集めました。この僕達は、主イエスの弟子たちを表しています。現代で言えば、私達キリスト者です。そして、みんなに十ムナ手渡して、「私がいないうち、これで商売しなさい」と命じます。一ムナは、当時の労働者の100日分の給料、現代の価値に換算するのは難しいのですが、100万から200万位の感覚でしょうか。少ないお金ではありませんが、商売を始める元手としては、少し心もとない。このムナは、果たして何を示しているのでしょうか。

マタイ福音書の譬えでも、主人が僕にそれぞれタラントンを渡して旅に出ますが、そのタラントンは、私達人間が神から与えられる「才能」だと言われています。そこから転じて、天賦の才能を意味する「タレント」という言葉ができました。ムナもまた、私達一人一人が神から与えられている才能、賜物と言っても

いいかもしれません。しかし、そうであれば、みんなに同じだけの一ムナの才能が与えられた事になるのですが、現実には、それぞれに与えられた才能はバラバラです。矢内原忠雄という方は、「このムナは信仰だ」といいました。それもありうる事だと思います。

私は、主人が帰って来たあとの僕達との会話に、ムナが何を示すかのヒントがあるのではないかと考えます。王位を受けて戻ってきた主人は、僕達を呼び寄せ、自分が留守の間にどれくらい稼いだかを聞こうとします。そのときの最初の方は次のように答えます。16節「ご主人様、あなたの一ムナで十ムナもうけました」。直訳すると、「ご主人様、あなたの一ムナは、十ムナをもうけました」となります。主語は、「私」ではありません、「私がもうけました」とは言っていないのです。主語は「あなたの一ムナ」、儲けたのは「あなたの一ムナ」なのです。続く二番目の人も同じです。『ご主人様、あなたの一ムナは、五ムナを稼ぎました』と報告しています。

そして、主人が「良い僕だ」と喜んだのは、まさに、この事ではないかと思うのです。一人目と二人目は、自分ではなく、主から預かった一ムナが力を十二分に発揮できるようにとそこだけに傾注し、知恵を絞り、実践したのです。主体は自分ではなく、ムナでありました。主イエスからいただくもの、それ自体が働いて良い実をうむもの、ですから、ここでの「ムナ」は、聖霊、御霊なる神と言ってもいいかもしれません。先ほども少し申しましたが、この僕達は、主人を憎む人々、敵対する人々に囲まれています。そんな中、主人のお金と分かるものを元手に商売するのです、よほどのことがなければうまくいかないでしょう。主人は僕達を守り導く力強いムナを託していったのだと言えると思います。ムナは、霊なる神、聖霊。霊なる神は私達の中で一ムナまでに小さくなってくださるお方です。小さくなって、私達一人一人の内に、私達の間で働いてくださり、愛に於いて、正しさに於いて、豊かな実りをもたらしてくださるのだと思います。だから、この譬えの中での「商売」というのは、まず何よりも神と自分と人を愛する事であり、そこから自然に生まれる主イエスの証によって、聖霊が与えられた人、キリスト者が増える事を言っているのではないのでしょうか。

この僕達の商売は、直前のザアカイ物語でいえば、徴税人の頭ザアカイが宣言した償いにあたると思います。ザアカイが、徴税人の不正な手数料で成した莫大な財産を自分の手中に治めたままでは、又、誰かを騙した償いもしないままでは、主に見出された彼の喜びはすぐに消え、その回心は一時的なものとなったでしょう。せつかく、ナザレ人イエスを、「わが主」と呼んだ信仰も消え失せていたのではないかと思うのです。しかし、ザアカイは、主からいただいた聖霊という賜物を用いる事に心を傾けたのだと思います。そうして、聖霊はザアカイの中で、ザアカイの周りで大きく実を結んだことでしょう。そういう将来を見通して、主イエスは、「救いはこの家に訪れた」と仰ったのです。これは、主イエスの昇天から再臨まで、この地上に主イエスがいらっしやらない時代、

今の時代の信仰者のあり方、教会のあり方を示すものではないかと思いません。

一方、主イエスを「我々はこの人を王にいただきたくない」という声は、いつの時代も大きく響いています。敵を愛せよ、という方を人間の世は受け入れたくはないのだから、頑強に抵抗します。この「声」に巻き込まれてしまったのが、三番目の僕といえましょう。彼は、時代の声、この世の声に圧倒され、長らく不在の主人の本当の姿を見失い、誤解してしまいました。「預けなかったものを取立て、まかななかったところからも刈り取る」悪逆非道な主人だと思い込んでしまいました。三番目の男の話しぶりは、明らかに前の二人とは違います。『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。このときの主語は「自分」です。「布」というのはハンカチのようなもの。パレスティナの強い日差しをよける為に労働者が首に巻くバンダナのようなものらしいのですが、その中にムナをかくしてしまいました。ハンカチの中に覆い隠すように、聖霊を自分の思いで覆ってしまえば、せっかくの聖霊も働いてくださる事は難しいのです。それほどまでに、小さくなってくださる、それが霊なる御神です。

更に注目したいのは、この男に対して、主人は全く稼げなかった事を問題にはしていません。世間に引きずられて、主人に対して誤解を抱いた事について、彼は裁かれています。しかも、その裁きは、もともと主人のものであったムナを彼から取り上げているだけです。主人はこの僕を自身の支配下から締め出してはしません。「蒔かない所から刈り取る」主人でない事は、このことからわかります。

さて、「この男の一ムナを十ムナ持っている男に渡せ」と王が命令すると、周りの人々が「あの人はすでに十ムナ持っています」と反論しますが、それに続けて王が言う26節の言葉「**言っておくが、だれでも持っている人は、更に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。**」は、もともとは、富が金持ちのところに集まって格差が広がる傾向にある現実世界の様子を描いた諺だったようです。しかし、主イエスがこの言葉を用いるときは、諦めや嘆きの言葉ではありません。私達に与えられる聖霊の働きを述べているのです。自分を小さくして、聖霊に大きく働いて頂いた経験、まるで自分では決してできない愛の業を、聖霊が内に働いてくださって成した経験がある人は、ますます自分を低くして、自分の思いではなく聖霊に大きく働いて頂き、更に豊かな愛の業を結ぶ事ができる、神や主イエス・キリストの事をよりよく知ることができるし、より強く神を愛し、自分を愛し、人を愛することができるようになる。しかし、自分を明け渡す事なく聖霊に働いて頂くという経験をしないままでは、やがて聖霊は窒息してしまい、豊かな実を結ぶことはできない、そんな信仰者の現実を、主イエスはおっしゃっているのだと思います。

4 敵対する者への神の怒りを受けた者

「我々はこの人を王にいただきたくない」と、敵を愛する救い主を拒んだ私達人間が造り上げたこの世界の罪の現実を直視すると、27節の神の怒り、「わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ。」という裁きは当然であり、その怒りの激しさに戦かざるを得ません。自分たちを神とする私達が作り上げた世界の中にある悲惨さを見つめ、神の裁きにおののく事は、救いの原点です。この神の怒りの激しさに戦く時、まさに誰がまともに神の怒りを受けたのか、裁きを受けたのかを知るから。それは、十字架上で苦しむ御子イエス・キリストでした。その十字架から甦ったのは三日目の日曜日の朝でした。ここに光があります。人間の闇の現実を追い払う永遠からの光です。この十字架と甦りのイエス・キリストから輝きでる永遠の光を知った者達が、イエス・キリストの弟子とされ、光の一ムナを与えられるのです。神を殺そうとする私達の闇の中に、神ご自身が来てくださり、そして大きな光となってくださった。私達が、救い主の光を映し出し、闇しか知らない人々に、命の光を示すために。父なるみ神と主イエス・キリストを賛美せずにはおられません。光がこの闇の世に宿ったクリスマスの出来事を思い起こすクリスマス礼拝は一週間後です。心から神を賛美し、その慈しみを喜び祝いたいと願います。